

第4学年「社会」学習指導案

授業者 岩坂 尚史

2月21日（土） 3階A室 10:00～10:40 （話し合い11:00～11:45）

1 単元名 わたしたちのくらしと自然災害～避難所運営はどうすればよいか～

2 単元について

自然災害はいつどこでおきるかわからない。だからこそ、社会生活を守るために、今後想定される災害に対し、対応していかなければならない。特に東京圏においては、中央省庁などの首都中枢機能や人口や建築物が密集しており、大規模地震が発生した場合、人的・物的被害や経済的被害は甚大なものになる。社会全体で考えていかなければならない社会問題である。

首都直下地震の被害想定と対策について首都直下地震対策検討ワーキンググループが昨年12月に報告書を出した。そこには、マグニチュード7.3の都心南部直下地震が発生した場合の被害想定が掲載されている。耐震化や木造住宅密集地域での防火対策の進展をふまえ、想定被害が平成25年時と比べて少し減少したが、死者は1万8000人、全壊・焼失は40万2000棟にのぼる。また、避難者は発生2週間後に480万人、避難所の食糧不足1300万食、平日正午の発生で帰宅困難者840万人など、以前として大きな被害が想定されている。この社会問題に対して、自助・共助・公助のあり方を考えていくことが、被害を最小限に抑えることにつながる。

本単元では、東京都や本校が位置する文京区の具体的な対策や、大規模地震発生時による避難所の設営を調べることを通して、想定される地震に対して自身がどのように向かっていけばいいかを考えていきたい。

そこで、避難所の設営のあり方を中心に考えていく。文京区では、避難所の自主運営・管理体制の確立を目的とし、全ての避難所に避難所運営協議会を設置し、避難所開設キットを各避難所の備蓄倉庫に配置している。区と地域住民と連携した避難所運営訓練では、発災直後に「参集した誰もが」「躊躇なく」「実働できる」ように、マンホールトイレの設営、区で備蓄している炊き出しかまどの実際の使用、段ボールベッド、投光器などの備蓄品の使用方法等を確認している。

ただし、「区と地域が協力して備えている」が、その避難所の設営の主体は各地域住民となる。様々な道具をどう使うのかそのタイミングはどうするかなど、そこには様々な他者を想定した判断が求められる。

その判断の検討を行うために、シミュレーションを行う。そして、立ち止まり問い直すことで、どのような対応が求められるかを吟味していく。

3 学習指導計画（8時間目／全9時間）

第1次 東日本大震災での東京の状況や首都直下地震の被害想定を調べる。…3時間

第2次 被害を少なくするための都や区の取り組み（公助）について調べる。…2時間

第3次 避難所の開設（共助）について調べ、一人ひとりのあり方について考える。…本時3/4時間

4 本時の学習について

（1）本時のねらい

避難所運営における判断をふり返り、一人ひとりが想定される震災にどのように向かえばよいかを考える。

（2）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
1. 避難所運営の際についての留意点について確認する。	・避難物資の置き場所や配布方法などの判断や、避難者の声にどう対応するのか等について話題にする。
2. 留意点に対しての解決策を考える。	・解決に向け、どのようなことが必要となるのか、一人ひとりの行動を見つめ直す事で改善できることがあることに気付くことができるように問う。
3. その解決策と自分自身のかかわりについて考える。	

□授業後の話し合いで話題にしたいこと

想定されるひとの思いやできごとをもとに、社会の問題について考えることができたか。